蠅蟎に関する研究: 中松正雄 Nakamatsu, M.: Studies on the mite, *Macrocheles muscae*

1913年に Ewing が蠅に寄生する蟎について報告をしている。我国でも花城、福島氏、更に岐阜市に於ても森下授教の報告がある。1957年秋再び岐阜市に発生があり偶々当教室の家兎飼育箱に当蟎の発生を見たので其の飼育を行つた所、*Rhabditis* 属線虫を与える事により当蟎の繁殖に成功した。当蟎は 28°C で約 1.6 日、其の生活最初の 3 日位に 1 日 20 個内外の産卵を行い、10 日間で約 100 個内外を産する。蠅蟎は単為生殖を行うが、其の際には雄のみを産出する。此の雄は完全な生殖能力を持ち、無交尾雌と交尾させると雌を産出する。雌は孵化後 3～5 日間に交尾しないと受精、或いは交尾能力が非常に悪くなる様だ。栄養状態によつても性は左右される様だ。発育時間は 28°C で 4 日、 20°C で 6 日、 17°C で 8 日位で 16°C 位がその発育限界温度である。温度抵抗性は 0° , 6° , 37°C . で 2 日、 15°C では 20 日それ以上も生存する。形態、卵は大きさ $440\mu \times 330\mu$ 位で親胎内で已に卵内に仔虫を形成しているものも見られる。幼虫は 3 対の脚を持ち、大きさ $385\mu \times 270\mu$ 位でその後期には後体部に第 4 脚目を含む。体毛は背部 28 本、腹部 15 本である。第一若虫は大きさ $405\mu \times 280\mu$ 位で 4 脚を持ち、体毛は背部 50 本、腹部 15 本。第二若虫は 4 対の脚で大きさは殆んど成虫に等しく $770\mu \times 540\mu$ 位、体毛、背甲板 56 本、腹部 23 本。雄成虫は特徴ある距状附加物を持つ鋏角を持つている。雌その他のものは橢円形であるのに雄では橢円形とは云いきれない。雌成虫は Ewing の記載に等しい様である。脚は凡ての時期の虫体が 6 節より成つていて、第 1 脚を除いたものは先端に特徴ある朝顔状の褥吸盤を持つている。

(岐阜医大・寄生虫)

1957年岡山県下に於ける蚊の消長と日本脳炎について: 稻臣成一・木村道也・山口昇・水落理・大塚信夫・深井春雄・片山三男・矢田春男・山本尚・岡田正・高橋俊朗・沖島格三・津田明良・石田正実 Inatomi, S., Kimura, M., Yamaguchi, N., Mizuochi, O., Otuka, N., Fukai, H., Katayama, M., Yada, H., Yamamoto, H., Okada, T., Takahashi, T., Okijima, K., Tsuda, M. & Ishida, M.: On the incidence of Japanese B encephalitis and seasonal distribution of mosquitoes in Okayama Prefecture in 1957

本年は岡山 2 カ所、倉敷、水島、玉島、玉野、児島、

瀬戸の南部 8 カ所及び津山、新見に Light-trap を 4 月より 10 月まで設置し、雨天以外週 2 度採集を行つた。何れの地区も大体 *Culex pipiens* は 7 月、*Culex tritaeniorhynchus* は 8 月に最も多く採集された。例年同様日本脳炎は *Culex tritaeniorhynchus* の最盛期に続行し 9 月上旬にもつとも多く発生した。しかしながら採集された蚊からの日本脳炎 virus の分離は、すべて陰性に終つた。

(岡山大・寄生虫)

都市下水水域における蚊幼虫相の周年消長: 中田五一・小野禎治 Nakata, G. & Ono, T.: Observations on the succession of mosquito fauna through a whole year in the urban sewerage

京都市内の各種発生源における蚊幼虫相の周年消長様相は、既に中田らの詳報があるが下水性水域は未調査のため、1956 年 6 月から 1 年間、左京保健所管内で実施した。対象水域は破損或いは土砂塵芥による閉塞で排水不良となつた下水溝 6 箇所（内 1 は暗渠、他は開渠）と他に児童公園内の下水集水桝 1 箇所であつた。調査間隔は約 1 週間で、年間延 84 回採集した。方法は口径 10cm 底径 5 cm、容量 250 cc の標準柄杓により蚊の幼虫と蛹を確率的に採集し、全部検鏡して種類、齢个体数を記録した。下水溝での採集成績は、1 年間 5656 個体、そのうちアカイエカが 97 % を占め、トラフカクイカは 3 %, 他にきわめて少数のコガタクロウスカを得た。集水桝での成績では、コガタクロウスカは出現せず、アカイエカとトラフカクイカだけが得られ、両種の割合は下水溝と概ね一致し後者が多少多い。季節的出現様相を見ると、下水溝はアカイエカが 5 月上旬から 12 月中旬まで引続き採集され、第 1 世代の初生幼虫の出現は 4 月下旬と推定される。12 月中旬以後は幼虫の成長は殆んど停止し、次第に死滅すると思われ、卵群を認めた最終月は 11 月 5 日であつた。トラフカクイカは 7 月中旬から 10 月中旬まで出現し、9 月上旬に一時アカイエカをしのぐ、コガタクロウスカは 5 月中旬にごく僅か出現した。集水桝ではアカイエカが 5 月中旬から 12 月中旬まで採集され、その間の消長様相は下水溝と概ね一致するが、対象水域が 1 箇所だけでしかも狭く隔離された水域だから、世代の推移様相が比較的よく揃う。またこの水域ではトラフカクイカが 7—8 月、9 月、11 月の 3 回、散発的に出現する点が下水溝と異なる。これは蓋があるために産卵機会が少く、且つ偶然に支配されるためと思われる。集水桝における本種の増減は、きわめて急速且つ顕著で、一度出現すればたちまちアカイエカを圧し、しかもすぐに消